


 巻頭言

## 温故知新

三井化学クロップ&amp;ライフソリューション株式会社

お小

ざわ澤

さとし敏



師走を迎えました。10月にこの原稿を書いている時点で、東京都心では夏日を14日、うち3日が真夏日という「統計開始史上初」という言葉が日常的に聞かれるようになってきました。10月19日には初めて箱根駅伝予選会の応援に立川の昭和記念公園を訪れましたが、この日も東京都心は30.1℃、立川近くの府中では29.6℃を記録しました。応援に訪れた人々もほとんどが半袖ポロシャツを着ており、それでも大汗をかくような暑さでした。予想外の炎天下のコースは過酷で、熱中症などで走れなくなる選手も数人、私の応援していたゴール1.5キロ手前でも倒れる選手を目の当たりするというレースでした。

平年であれば秋雨前線が消え、10月の中旬以降は涼やかな秋風の吹く快晴を楽しめる季節ですが、今年は10月下旬にまだ秋雨前線が停滞しています。地球温暖化の影響で害虫や病原菌の生息域が広がり、これまで被害が少なかった地域でも病害虫が増加しています。害虫の冬季生存率も上がり、活動が活発化し発生時期もずれるなど、年間を通して農業者の皆さんも予想しづらい天候に、作物保護の術が増えた今でもご苦勞が多いことと思います。野菜の価格高騰や米価の上昇がニュースで取り上げられるたびに、農業者、生産者のご苦勞が十分に伝わっていないことを感じます。

今年、農薬開発の変遷について寄稿する機会をいただき、先達の歩んだ道を辿るために文献を調べました。歴史を振り返ることは新鮮で、有機合成農薬の工業的生産第一号は、三共が1921年にクロルピクリンを製造したこと、また江戸時代に作物保護剤として画期的であったものとしては、鯨油を使用したウンカ防除方法であり、農薬の始まりであろうことを再確認しました。江戸時代の記録である「除蝗録」の現物を見るために国立国会図書館を訪れるつもりでしたが、日植防の資料館を訪れた際、なんと日植防の資料館に保存・展示してありました。除蝗録は、web上では国立国会図書館や神戸大学付属図書館にデジタル資料としてみることもできますが、現物を見られるのは感慨深いものでした。資料館を2日にわたり訪問し、各種資料を閲覧させていただきました。農薬の原点として鯨油とクロルピクリンという程度の知識でしたが、資料を読むにつれ新たな発見があり、浅学菲才を思い知った次第です。

日本における初めての有機合成化学農薬としての工業的生産はクロルピクリンでしたが、農薬の工業的生産は、1910年に日本舎蜜製造会社（現日産化学の源流の1社）が硫曹液の名で無機化合物である石灰硫黄合剤をカイガラムシの防除や麦のさび病防除に生産したのが学会社の工業的生産の原点であると日産化学工業の社史で知りました。また、ウンカの駆除法として普及された初めての農薬としては、「福岡県遠賀郡水巻町八剱神社の合祀神社の一つである保食宮は古来より五穀豊穡祈願の郡宋社であり、1670（寛文10）年蝗害発生の際、当村の蔵富吉右エ門が「この神のお告げ」を受けて、鯨油を駆除剤に使い害を免れたと人々に伝えた。その後九州はもとより西日本一帯までも拡まった。この方法を発見したことは特筆大書すべきこと」であり、その内容は、1826（文政9）年に豊後国（大分県）の大蔵永常が「除蝗録」に図解をつけて鯨油を中心とした注油駆除法をまとめられていると再確認しました。しかしながら、農薬の記録としては1600年の「家伝殺虫散」があることを日本農薬発行の農薬ニュース第32号（昭和28年7月1日発行）で知りました。農林省中国農業試験場害虫研究室長であった岡本大二郎氏が、農薬に関する一古文書の紹介としてその全文を紹介したもので、同氏が興味深い点として次の4点を挙げていました。①ウンカの発生予察を論じている。②撒粉防除が行われていた。③煙霧法が慶長の昔に思いつかれていた。④朝顔の種を鯨油の代わりに使うことを除蝗録よりも前に唱えられている。さらに岡本氏は1992年発行「虫獣除けの原風景」で家伝殺虫散を改めて紹介し、これに加え平安初期807年に成立した「古語拾遺」を紹介しています。古語拾遺の中には、害虫防除について、呪術的ではあるが、具体的な方法が初めて記されており、害虫防除の宝典として考えられていたようだとして記しています。資料館を訪れ貴重な本を手になければ知りえないことであり、先達の防除に対する並々ならぬ努力などを見て、新たな発見や考察のヒントを得ることができました。

ネット通販で簡単に本も買え、web検索も便利ではありますが、現物の文献を手にするることによる「偶然の出会いや発見」には特別な価値があると思います。ご興味のある方は、ぜひ一度資料館を訪れてみてください。

（クロップライフジャパン 会長）